

## 基調講演 講師のご紹介



**講師**  
**藤原 建紀 京都大学名誉教授**  
**陸と海の窒素とリン**

従来、海や湖の環境問題では、「栄養イコール汚れ」と捉えられてきた。しかしながら、20年近くにわたって栄養塩類(窒素・リン)濃度の低下を続けている海をみていると、富栄養と貧栄養の間の、かなり広い範囲で、豊かで美しい海があったことに気づかせられる。陸域から沿岸海域にいたる栄養塩動態、窒素とリンの挙動の違いについて解説する。

### プログラム

14:30-14:35	開会挨拶		
14:35-15:35	【基調講演】陸と海の窒素とリン	京都大学 名誉教授	藤原 建紀
15:35-15:45	休憩		
15:45-17:15	【パネルディスカッション】	広島大学 名誉教授	松田 治
	コーディネーター		
(15:45-16:00)	【事例報告1】 広島湾流域圏の物質循環解析から持続的カキ養殖を考える	広島大学大学院生物圏科学研究科 教授	山本 民次
(16:00-16:15)	【事例報告2】 漁業者からみた瀬戸内海の現状と課題	兵庫県漁業協同組合連合会 専務理事	突々 淳
(16:15-16:30)	【事例報告3】 里海づくりは人づくり 一岡山県日生の事例一	NPO法人里海づくり研究会議 理事・事務局長	田中 丈裕
(16:30-16:45)	【事例報告4】 三河湾はまだ富栄養化しているのか？ 一近年のアサリ不漁原因の解析を通じて一	名城大学大学院総合学術研究科 特任教授	鈴木 輝明
(16:45-17:15)	ディスカッション		
	閉会挨拶		

## パネルディスカッション コーディネーター・パネリストのご紹介

**コーディネーター**  
**松田 治 広島大学名誉教授**

瀬戸内海は2015年の「瀬戸内法」改正により、目指す方向を従来の「きれいな海」から「豊かで美しい海」に大転換した。様々な関連の制度もこれに沿って改められた。しかし、現実を直視すると、「豊かで美しい瀬戸内海」を実現することは容易ではない。このパネルディスカッションでは、栄養塩類管理の在り方を中心に、様々な考え方や実際の取り組みを知り、我々は今、何をしたらよいのかを参加者と共に考えたい。



**パネリスト①**  
**山本 民次 広島大学大学院生物圏科学研究科教授**

### 広島湾流域圏の物質循環解析から持続的カキ養殖を考える

陸域からの栄養塩負荷が減少し、貧栄養化が進む広島湾では、これまで日本一の生産量を誇ってきたカキ養殖が危機的状況にある。さらに2014、2017年は、稚貝の着底数が通常年の2~3割という状況で、このような採苗不良年が2年続くと、多くのカキ養殖業者が廃業せざるを得ない可能性さえ指摘されている。カキの持続的生産にとって適切な栄養塩負荷量について、生態系モデルを用いて示す。



**パネリスト②**  
**突々 淳 兵庫県漁業協同組合連合会専務理事**

### 漁業者からみた瀬戸内海の現状と課題

今振り返れば、兵庫県瀬戸内海で一番魚が獲れていたのはS60年~H7年までの10年間だった。高度経済成長期の「瀬戸内海」は、さまざまな規制によってきれいになったが、H7年以降、水産資源の減少が始まった。H13年のノリの色落現象をきっかけに漁業関係者による「豊かな海を取り戻す」動きかけが始まり、自らも海底耕耘、森づくり、かい掘りを実施している。知事・市長会議とともに勝ちとったH27年の瀬戸内法改正は漁業者の悲願であり、実効性のある施策に期待し一日でも早く栄養のある豊かな海を取り戻したい。



**パネリスト③**  
**田中 丈裕 NPO法人里海づくり研究会議理事・事務局長**

### 里海づくりは人づくり 岡山県日生の事例一

海洋生態系における物質循環の特性は栄養塩の生態系への回帰の速さにある。特にアマモ場等の藻場は物質循環の核となっている。備前市日生町では、ほとんど消滅したアマモ場を、漁師達を中心となって、30年以上の歳月を費やし2015年には250ha以上にまで回復させた。今では子ども達から大人まで地域や世代を越えた活動に広がっている。これまでの経緯と今後の展開を紹介する。



**パネリスト④**  
**鈴木 輝明 名城大学大学院総合学術研究科特任教授**

### 三河湾はまだ富栄養化しているのか？一近年のアサリ不漁原因の解析を通じて一

伊勢・三河湾の最も重要な課題は貧酸素水塊の改善であり、その対策としてCOD、TN、TPの水質総量規制が行われてきた。しかし、伊勢湾の貧酸素化は拡大傾向、三河湾は横這い傾向でありその効果は不明瞭である。逆に、近年栄養不足によると思われるアサリの不漁が三河湾で起こり、その対策の一環として広域流域下水道施設の管理運営が実施される事態となっている。本シンポジウムでは近年の伊勢・三河湾の貧酸素化や栄養塩類の状況について報告し、三河湾におけるアサリ不漁原因との関係を考察する。

